

学校音楽教育の未来と ICT 活用

話題提供 小梨 貴弘(埼玉県戸田市立戸田東小学校)

話題提供 大木 まみこ(埼玉県教育委員会)

コーディネーター 永岡 都(昭和女子大学)

問題提起・司会進行 深見 友紀子(大東文化大学)

2017年3月に告示された新学習指導要領・総則において、「情報活用能力」は言語能力等と同様に学習の基盤となる資質・能力と位置づけられた。それに伴い、「平成30(2018)年度以降の学校におけるICT環境の整備方針」では、学校の生活や学習においてもICTを活用できる環境をより一層整備していくことが重要とされた。この整備方針は、音楽室をはじめとする特別教室も対象となる。

また、2020年度に向けて、学習者用タブレット端末の導入、学習者用デジタル教科書の開発が加速している。音楽科が教科のひとつである以上、学校教育全体に巻き起こるこのようなICT化の潮流を無視することはできない。

本学会においては、2014年に「音楽教育実践ジャーナル」(11巻2号)で『音楽教育と電子テクノロジー — 「共有」と「発信」を目指して—』を特集したが、それ以降、ICTに関する共同企画は行われていない。ジャーナル発刊から5年が経過した今、大きく変貌する現状を鑑み、本企画の実施に至った。

プログラミング教育の導入により、音楽科でも、教科の特質に応じてプログラミング的思考力の育成を念頭に置いた授業の実施等、検討しなければならない課題が多い。本企画では、①そもそも音楽科におけるICTとは何なのか、②音楽室に教員用PC、学習者用タブレット端末があるという状態をデフォルトとした場合、どのような音楽室構想が描けるか、③ICTを進めるために、学校と教育行政との連携はい

かにあるべきか、④アナログ重視のベテラン音楽教員をどのように啓蒙するか、等に焦点をあてる。

まず、音楽科教育と教育工学両分野の研究者である深見から、「2018年以降の学校におけるICT環境の整備方針」の概要を述べる。また、1980年代からこれまでの動向も振り返りながら、音楽科教育におけるICTについて現状を踏まえた再定義を試みる。

次に、小学校音楽専科教員である小梨より、小学校の音楽科授業における、授業者、児童それぞれによるICT活用の具体的事例と、教育的効果について述べる。パソコン室でのみ行っていた旧来の学習形態とは異なり、タブレット端末等の普及によって音楽室でも十分使用可能となったICT機器を、児童の主体的、対話的で深い学びの実現のために、音楽科でどのように効果的に活用していくべきか、今後の展望を交えながら考察する。

また、大木は教育行政の立場から、教育現場のICT環境の状況、整備がなかなか進まない原因、今後の方向性について話題提供をする。さらに、教員の年次研修等で取り入れているICT活用の実践や、授業改善への提言を行う。

本企画の主旨は、音楽科授業において、アナログかデジタルのいずれかを選ぶのではなく、場面に応じてどちらかを選び、時に補い合い、時に往復する関係を目指すことである。ICTを活用する意欲と情報活用能力は、音楽科教育の研究者と教員にこそ求められている。フロアとの活発な協議を期待したい。